

臨床医のための症例プレゼンテーション AtoZ [英語 CD 付]

齋藤中哉（著） Alan T. Lefor（編集協力）

研修医の症例発表の内容を吟味

医学書院からこのたび、自治医科大学客員教授・齋藤中哉先生による臨床医のための症例プレゼンテーション法を説いた教則本が出版された。

齋藤教授は日本の医療界では数少ない、医学教育学を修めた臨床家である。臨床医学の指導医の立場から本書を出版し、日本の医学界に「臨床医学教育の基礎」を敷衍し、その普及に努めんとしているのである。

したがって本書では、臨床医学教育に携わる人々にとってわかりやすく、症例プレゼンテーションの基礎となる情報が網羅されている。

類書では、異なる病院で3回の1年次レジデントを経験した亀田総合病院リウマチ膠原病内科医長・岸本暢将先生による『米国式症例プレゼンテーションが劇的に上手くなる方法』（羊土社、2004）があるが、研修医の症例発表の内容を吟味し、その評価を下す指導医の立場から症例プレゼンテーションに必要な知識・技術を網羅的に紹介する本を上梓した例は、わが国では齋藤教授をもって嚆矢とするものであると理解している。

その内容をざっと見渡してみると、問診、理学所見の取り方や問題点の整理法その他、患者を全人的に理解するための10か条や痛みに関する重点項目10か条などが詳述されている。それらは臨床医療のごく一部を表したものであり、すべての主訴についてこのような順序を踏まえた聴取項目が存在していることを示唆するものである。

これらの内容は、著者自身が十分に臨床医学の何たるかを知り、臨床の実力が十分になれば到底書けないような内容ばかりである。

臨床研修事業に従事する医療機関の指導医、あるいは屋根瓦方式の上級研修医は、少なくとも明日の日本の医療を担うことになる現在の下級研修医に対する臨床指導の基本的ノウハウを知るべきであり、この本を

臨床指導者として参考にすべきである。また、英語によるプレゼンテーションの実例をいくつかCDを添えて付録している点でも、この種の本では異例である。

患者を全人的に診る臨床医学教育の実現へ

これまで臓器中心の臨床教育を実施してきたわが国の医療界に対し、患者を全人的に診る臨床医学教育を導入しようとする試みは、おおいにあずかって多とすべきである。

日本の医療界では、基礎研究や論文発表が評価の対象とされ、ややもすると臨床医学教育自体がないがしろにされがちである。しかし、その姿勢は、日本の1億3千万国民の求める医療とは大きく乖離するものであり、医療自体が受療者たる国民のものであることを思えば、この本の著者のように臨床医学に力を注ぐ人々に、もっと大きな関心が集まってしかるべきである。

願わくば、病棟にあつては主治医のその日の当直医に向けた sign out system についても、ページを割いて言及してほしいと思う。そうすれば、各研修医は今よりももっと安心して病院を離れることが可能になるし、各主治医が担当患者管理のために、当直でもないのに夜遅くまで病院に残る現在の臓器中心の臨床教育や研修のあり方にも、いくばくかの改善の糸口を与えることになったに違いないと思う。

しかし、だからといってこの本の真価に影響はなく、わが国の医療界に属する医師たちが臨床医学教育のあるべき姿を考える上で大いに参考にすべき良書であり、自信をもって推薦する。

群星沖縄臨床研修センター長 宮城征四郎

●B5 頁248 2008年

定価 3,990 円（本体 3,800 円＋税 5%）

[ISBN978-4-260-00278-3] 医学書院刊